

「 「危機感」をもつこと 」

長崎県 海星中学校 3年 ^{もろたに}諸谷 ^{ゆき}由紀

私は、「土砂災害」というものを実際に目にしたり、経験したりしたことはないが、学校の授業や、テレビ、ニュースを通して、全国各地で発生した土砂災害について多くの情報を得た。その中でも特に印象に残った土砂災害の一つが、1982年(昭和57年)7月23日から翌日にかけて長崎県長崎市を中心とした地域で発生した「長崎大水害」である。

例年よりも梅雨入りが遅く、7月上旬まで少雨の傾向が続き、節水を呼びかける自治体もあったそうだ。しかし、一転、梅雨末期に西日本各地に大雨が集中する。連日の大雨によって地盤が緩み、土砂災害が発生しやすい状態だったという。23日、九州北部に梅雨前線が北上した。当初は対馬市や平戸市など長崎県北部を中心に雨脚が強かったが、その範囲は次第に南下した。翌日の24日にかけて、暖かい湿った気流が舌状に進入している部分と前線が結びついて大雨を降らせる「湿舌現象」が発生し、集中豪雨は想像を絶するものになったという。この集中豪雨によって多くの死者や行方不明者、負傷者が出た。建物の被害では、床上、床下浸水、倒壊などが多く発生した。特に、中島川の氾濫により、重要文化財である眼鏡橋をはじめとする多数の石橋が倒壊するなど、甚大な被害をもたらした。ここまで被害が広がったのには、さまざまな原因がある。まず、長崎の地形である。長崎は斜面が多い都市として有名だ。以前から続いていた大雨によって地盤が緩み、土砂災害が発生しやすくなっていたのだ。「水害」ではあるものの、土砂災害による犠牲者が溺死者を大きく上回り、全体の約八割から九割を占めたことは、長崎大水害の特徴である。

次に、情報の伝達不足である。夜間、停電という悪条件の中で、道路の冠水、土砂災害、橋の決壊などが短時間で発生し、交通が寸断、通信も寸断されたために、行政に救助を求める通報すらままならなかったのである。通報をうけた行政側も、道路の寸断などにより、思うように救援ができず、被害が拡大した。

そして、長崎市民の「危機感」、「警戒心」の薄さである。以前から続いていた大雨で何度も警報が発令されていたが、それまでは大きな被害がなかったため、この時の警報発令でも特に危機感や警戒心もなく、聞き流してしまったのであろう。そのため、避難をしていない人が多く、被害の拡大につながった。

私は、長崎大水害について調べるうちに、危険が迫っている時の情報を受けとる手段が現在の私たちと比べて格段に少ないことに気づいた。今はテレビの気象予報以外にも、スマートフォンのアプリなどで、より詳しく、情報を手にすることができる。また、SNSなどで自分たちがおかれている状況を発信することもできる。おそらく、過去の大きな災害をもとに改良が進められ、より精度の高い情報を発信する努力がなされてきたのだろう。一方で、情報にふり回されてしまうこともある。日頃から自然災害に危機感を持ち、警報などが発令されたときは「自分たちの身に危険が迫っているのだ」という意識を強くもとうと思った。長崎大水害を調べるために、両親にも話を聞いてみた。小中学生だった両親は、しっかり覚えていて、話をきかせてくれた。「雨が怖い」と感じたのははじめてだったという。文字では伝わらない思いを知ることができた。とても大切なことだと思う。そして、いざというときに近所の人たちと一緒に助け合いながら避難ができるように、日頃から道で会ったときに挨拶をかわすなどしてお互いの顔を知っておこうと思った。近年、日本では少子高齢化が急速に進んでおり、高齢者の割合が若者に対して高くなってきている。私の住んでいる地域も七割近くが高齢者である。階段や坂が多く、防災無線も聞こえにくいので、一人で避難するのは危険を伴う。このようなときに、いち早く異変に気づいた人が一緒に行動、避難すれば被害を最小限におさえることができると思う。私の町には、市が指定した避難所へ行くことが難しい人のために、頑丈な建物を避難所として開放してくださる施設があるのでとてもありがたい。大雨のシーズンになると、地域の危険箇所などの情報が載った回覧板が出る。家族の誰かが見ているだろうと、目をとめることなく過ごしていたが、これからは自分の目で確かめるようにしたい。私のところは大丈夫、という考えではいけない。一人一人が危機感をもつことが、防災の第一歩だと思う。自然災害は防ぎようがない。しかし、その被害を少しでも小さくすることは可能だと思う。「危機感」をもつことも、最大の防災だと思う。